立場が変わると何が見える

～その5　家族が本気で語らうと　～

坂口　伊都

はじめに

５ 月だというのに暑日が続き、季節の移り変わりの速さを感じます。寒暖差が激しくて、何を着たらいいか迷い、体調を崩しやすい時期ですが、皆さまお元気でしょうか。

人が繰り出すゴールデンウィークが戻ってきて、懐かしいような、慣れないような不思議な感覚になりました。5月4日に友人と二人で動物園に何十年かぶりで出かけました。20歳年上の友人がカメラを始め、ゴリラを撮りたいから一緒に京都市動物園に行こうと誘われました。友人によるとゴリラがいる動物園は、千葉、東京、静岡、愛知、京都の動物園にしかいないそうです。子どもの頃は、どこの動物園にもゴリラがいたように記憶しているのですが、絶滅寸前になっている種がいたり、繁殖や飼育が難しいことが理由だと知りました。

私は、スマホカメラになりますが、動物を撮ってみたいと思っていたので楽しみにしていました。何も好き好んでゴールデンウィークに行かなくてもいいのですが、GW だからと言って息子から連絡があるわけでもなく、娘はバイトに忙しそうで、夫はいつも通り仕事。私には自由に使える時間がたっぷりあったので、予定大歓迎でした。子育て中は、子どもが喜ぶと期待して動物園に行きましたが、子ども抜きで好きに動物園を見て回れる日が来るとは。子どもの手が離れたことを改めて実感します。

ゴリラは、動物園の真ん中にいて、目玉になっているとわかりました。ゴリラの親子でしょうか、気持ちよさそうに昼寝をしていました。できれば、静かなところで眠りたいよね、ごめんね。

子どもと行った時は、多くの動物が檻に入れられて、覇気がないように見えましたが、何十年かぶりに訪れたら、動物への負荷が軽減するようにいろいろ工夫が凝らされていました。動物園で泣いている小さな子を見て、我が家でも同じような事があったなぁと思い出

します。バギーに乗って連れられている赤ちゃんは、今日の事を全く覚えていないものですが、赤ちゃんを連れて出かけたくなる気持ちはよくわかります。私も、子どもの世話に明け暮れる毎日から解放されたくて、たまには外に出て息抜きをしたいと切望していた頃があります。動物園で動物を見ながら、半分は人間観察を楽しんでいました。

翌日の5日には、石川県で大きな地震がありました。その後も各地で比較的大きな揺れが続き、地震が起きやすい時期に生きているのだろうなと改めて感じます。家族旅行にコロナで外出を控えていた3年が終わり、人が動き出し、自然界も動き始めているようです。戦争、物価の上昇と不安定な時代を私たちは生きているのですね。

今回は、前号の短信で紹介した、立命館大学主催のフォスタリング・ソーシャルワーク専門講座で、里親家庭の体験を話したことを書きたいと思います。私が、里親をしたいと言い出し、そこに巻き込まれていった家族の話です。講座という舞台で家族が話すと何が起きたのかを書いていきます。どうぞ、最後までお付き合いください。

打ち合わせが始まらない

娘と二人で里親家庭の経験を話す機会は何度かあり、その時はいつも打ち合わせをしてきました。今回も私が事前に資料を作り、娘は打ち合わせをする気満々ですが、夫は気が進まないのか、いつまで経っても打ち合わせをしようとしません。作った資料も直前になるまで、見ていないことが判明しました。夫の仕事も忙しそうでしたし、慣れないことなので、腰が引けるのも仕方がないかと半ばあきらめていました。

それでも、前日になるとさすがに焦ってきます。もう打ち合わせを始めてしまおうと、資料を広げ、この部分は娘が前にはこう話していたけど、今回はどうする？と娘に確かめ、それを夫にも聞いてもらいました。夫には、その当時を思い出して話したらいいからと伝えましたが、夫は「思い出せない、どうだったかなぁ」の連発で、腰の引けが続きます。とりあえず、「妻が言い出したから」と答えるのは禁止しました。始まりがそうであれ、自身の考えは誰にでもあるので、自分の事として話すことに徹してもらいました。

話す内容は、自己紹介をしてから里親の経緯を説明し、家族の転機として次の4つです。

その1　母親が里親をしたいと言い出した時
その2　里子がやってきた時
その3　トラブルが止まらない時
その4　再会した時

原稿を作ることは一切せず、その時に感じたことを語っているのですが、あまりにもざっくりとした確認だけで打ち合わせが終わり、どうなることか不安が残りながら会場に向かいました。

講座本番

講座を受けているのは、里親支援をされている方だったので、里親をしたいと言い出した私の話より、それに巻き込まれた家族の声を聞いていただく方がいいだろうと私がインタビュアーになり、夫と娘にその時の気持ちを語ってもらう形にしました。

夫は不慣れなので、何度か経験ある娘に先に振り、それを受けて夫が思い出しながら話します。娘の話は、忖度がなく、率直な物言いで剛速球ストレートを投げつけてくるので、毎回何を言われるのかハラハラします。

まず私の方から、

家族として暮らしている中に里親をしていと話したことで、家族を巻き込んでしまったと今は感じていると話しました。

里親制度は、善悪で言えば「善」です。夫は、高齢者施設で働いている人間で、妻からそんな申し出があれば、「嫌」とは言えない。そして、私が里親制度を説明すればするほど、子どもたちも「No」とは言えなくなります。その当時はそのことをわかりませんでしたが、振り返ると答えが決まっている提案をしたのだと気づきました。

その流れを受けて夫は、「妻は言い出すときかないので」と言い、

それに私がカチンとなりました。

「夫は何でもいいと答える人なので、私が持ちかければ深く考えずにやればいいと言うだろうから、なかなか言い出せなかったところがあったのです」

と反撃。公開夫婦喧嘩のようになり、会場が苦笑いに包まれてしまいました。

この会話は、日常の中で出てくることはなく、夫も私も相手がそんな風に捉えていたのかと知りました。夫にそこまで頑固だと思われるきっかけがよくわかりませんが、きっと頑固なのでしょう。

夫は、本番中に里子との生活を徐々に思い出していったそうです。それまで、なかなか思い出せなかったものが、本番の中で鮮明に思い出していったと後で教えてくれました。

里子のトラブルでは、自分が子育てをしていく中で良かれと思ってやっていたことが、里子にとっては、どうだったのかと講座で話しながら内省をしていったようです。

例えば、里父と一緒に出かける。里父の好きな場所に里子を連れていく。
それが、里子にとって刺激になって、一人で黙って電車に乗って行ってしまうことがあった。

自分が良かれと思ってしていることに妻から苦情を言われると、反発心が起きます。
関係が近いなら、なおさらです。夫は、
「あの時は自分がしていることが里子を刺激していたと気づけなかった」
と話していました。

人のバランスは面白いもので、娘と二人で話す時と夫が加わって話す時では、雰囲気も変わります。そこに触発されたのか、娘から初告白が飛び出しました。
小学6年生の時にファミリホームに1週間ほどお泊りに行く機会があったのですが、そこに暮らしていた年上の女の子と喧嘩をして、泣かせてしまったそうです。

私の頭の中は混乱しました。その当時は楽しかったと言って帰ってきて、その後高校生になってから、あの時はしんどかったと知らされ、実は年上の子を泣かせてしまったんだと話しています。

「うん？泣かされたのではなくて、泣かせたの？」
「そう、何か文句あるならはっきり言えって言われたら、じゃあ言わせてもらうけどと、お兄ちゃんに言うように言い返したら泣いちゃった」

子どもの心は複雑です。
楽しかったと言ってニコニコ顔で帰ってきた小学6年生、
あの時はしんどかったと泣かれたのは高校1年生、
実は年上の女の子を泣かせてしまったと告白されたのが、大学3回生。

どれも娘には真実なのでしょう。
娘の前で、父も母も正直な気持ちを語っているのを聞いて、感化されたようです。

里父、里母、里姉が揃うことで、より家族の姿が立体的に浮かび上がりました。家族同士でも、相手の気持ちを理解しているようで理解できていなかったことがわかります。
講座の中で、夫の気持ちが伝わってくる場面がありました。夫は里父として、里子と離れる際、児童相談所まで連れて行きました。

話しているうちに、その場面が蘇ってきたようで、夫が言葉を詰まらせて涙ぐみました。この時のこと

を思い出さないようにこの時まで、複雑な感情に蓋をしていたのでしょう。涙をこらえながら、何回も話そうとして声を詰まらせ、「すいません」と言っている姿が印象的でした。

この姿を目の当たりにして、娘も私も驚きました。
父にこんな一面があったとは。
この場がなければ、一生知らずに過ごしていたと思います。

里子との別れは、私たちにとって大きな穴が開いたような経験でした。
私は、身を切られるような思いでした。
里子と離れてみると、家族3人揃って話すのは里子との思い出ばかりが出てきます。

現在は、元里子と数か月ごとにお出かけをしています。御朱印集めや甘いものを一緒に食べたり、洞窟に行ったこともありました。
元里子には、あなたが嫌いになったから離れて暮らすことになったわけではないと知ってもらいたかったので、ボランティアとして外出できないかお願いしました。里子に会いたくないと言われれば、諦めるしかありませんが楽しみにしてくれること、出かけている時にちょっとした甘えを出してくれることがとても嬉しく感じます。外出の時間は私たちにとって、やさしい時間となっています。

今でも、何が正解だったのか、里子は我が家に来て良かったのかどうか等、わからないことだらけで、この感覚はこれからもずっと続くのだろうと思います。

娘と二人で体験を話していた時は、娘に質問が集中していました。里姉という立場で良いことも悪いことも語る存在は珍しいので、娘の語りを聞きながらそれぞれに子どもの顔を思い浮かべている方が多かったように思います。
その展開は、今回も変わらないだろうと思っていたのですが、里父が入ることで、里父と里母に向けられる質問が多くあり、意外でした。里父と里母が里親家庭をしながら感じていたこと、見ていたこと、大切にしていたこと等がそれぞれ違っていたのが要因の一つかもしれません。

不思議な体験

講座が終わってからの帰り道、「皆で話せて良かったね」が3人の感想でした。何が良かったのかはわからないのですが、貴重な体験になったことには確信を持てました。

私たち家族に何が起きていたのだろうと夫や娘に聞いてみました。夫は、自分たちがしてきたことに関心を持つ人がいることに驚いたそうです。誰が自分の話を聞きたいのだろう、そんな人がいるのかと思っていたそうですが、真剣に聞いてもえ、質問を多く受けたことで、自分がしてきたことを初めて認められたと感じられたと話してくれました。里兄である息子にも講座に出てみないか誘ったのですが、

「自分が人に聞かせるような話は一つもないので出ることは遠慮します」と辞退した感覚と同じだったのだとわかりました。

娘は、「家族だから言えることもあるけど、逆に言いにくいこともあるから、こうして話せたことはいいことだと思う」と言っていました。講座で話す体験は、私たちにとって心温まる経験でした。良い事だけでなく、辛い話しもありましたが、そこをお互いに知ることができ、家族に対して、もっとそれぞれの気持ちを受けとめていという感覚になりました。

講座という特別の場で、自分が話すことを求められている場に身を置き、

第三者（社会）が耳を傾けてくれることで、話に値することだと感じられた

家族の話から、それぞれの思いを知ることができ、
家族の意外な一面もわかった

自分もわかるように意識して話そうとして結果、自身の整理をしていく作業をし、
家族として分かり合える可能性を知った

この講座で家族と一緒に話せたことは、私の気持ちを楽にさせてくれました。

今回のような気づきが多く起こるような話は、その後の生活の中では起きていません。講座の前はよく、家族と話しているようで肝心な話ができない、わかってもらえないと感じ続けていました。講座が終わってからも家族との話は、そこまで深まるものになっていませんが、これまでとは違う何かを手に入れ、余裕を持っていられる感覚が今はあります。

家族への理解が深まる話をするためには、非日常的な設定がいるのでしょう。講座の時にできたような話が家族の中で、もっとできればいいのにと思いますが、難しい。わかっているようでわかっていない、でも分かり合いたいと思いながら生活していくのが家族なのですね。